弘法大師行狀記

五

弘法大師行狀記卷之九

天長二年四月廿日　勅ふりて東寺の講堂を
建立きしかば　勅使參議右大辯直世王俗檢
校參議右大弁伴宿禰稱麻呂道ありて　玉體不豫の
と紀御立願の事ありしに　聖躬やすからずして天心
あらぐやうなり　則彼御願とて給むが為ふ
大師みづから仁王經の一曼荼羅の尊像と化
あらはし　山科安堂にたてまつりて本尊と為
ず免給ふ形刻功成て後公家の御尊ふ祈法況

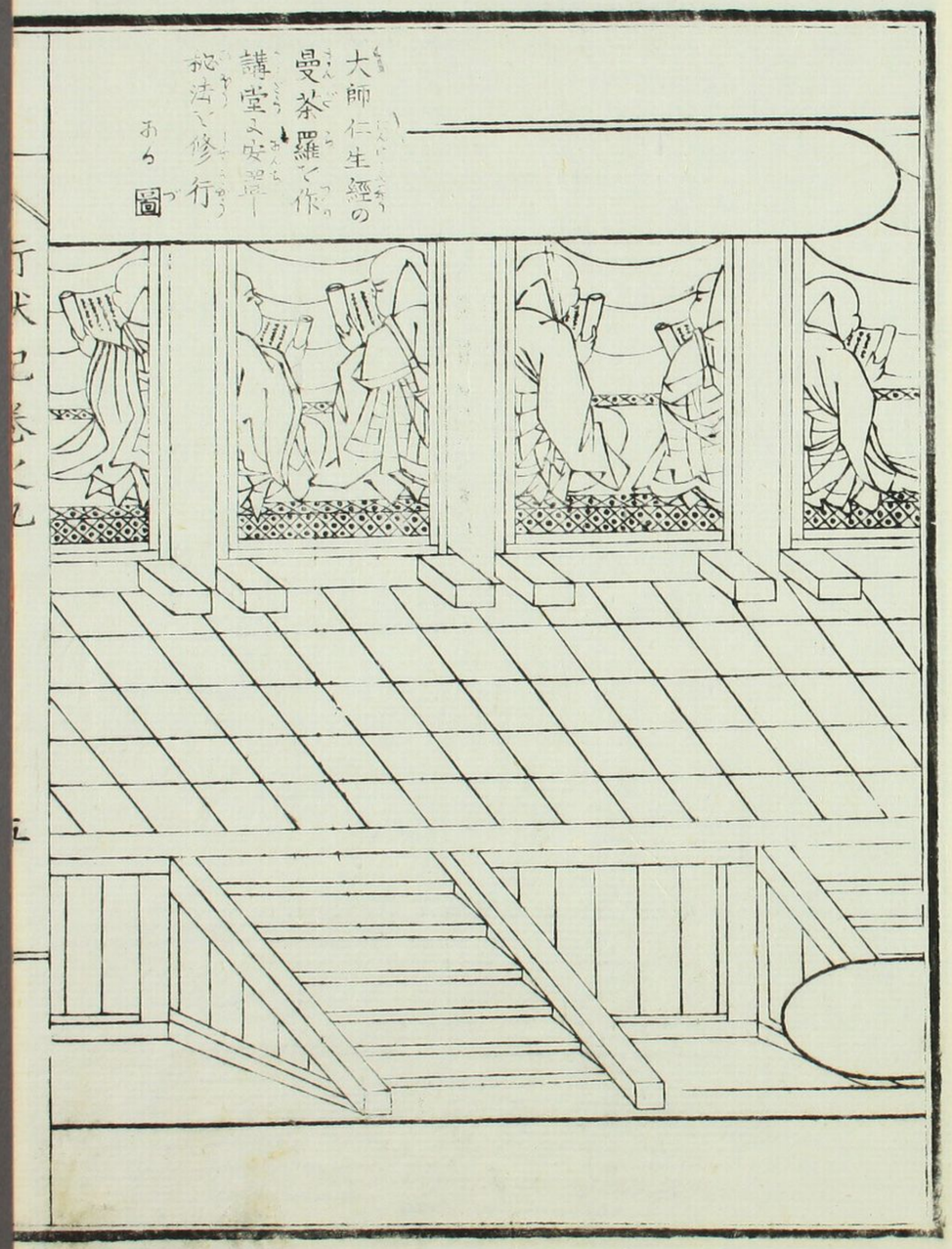
九曜文庫

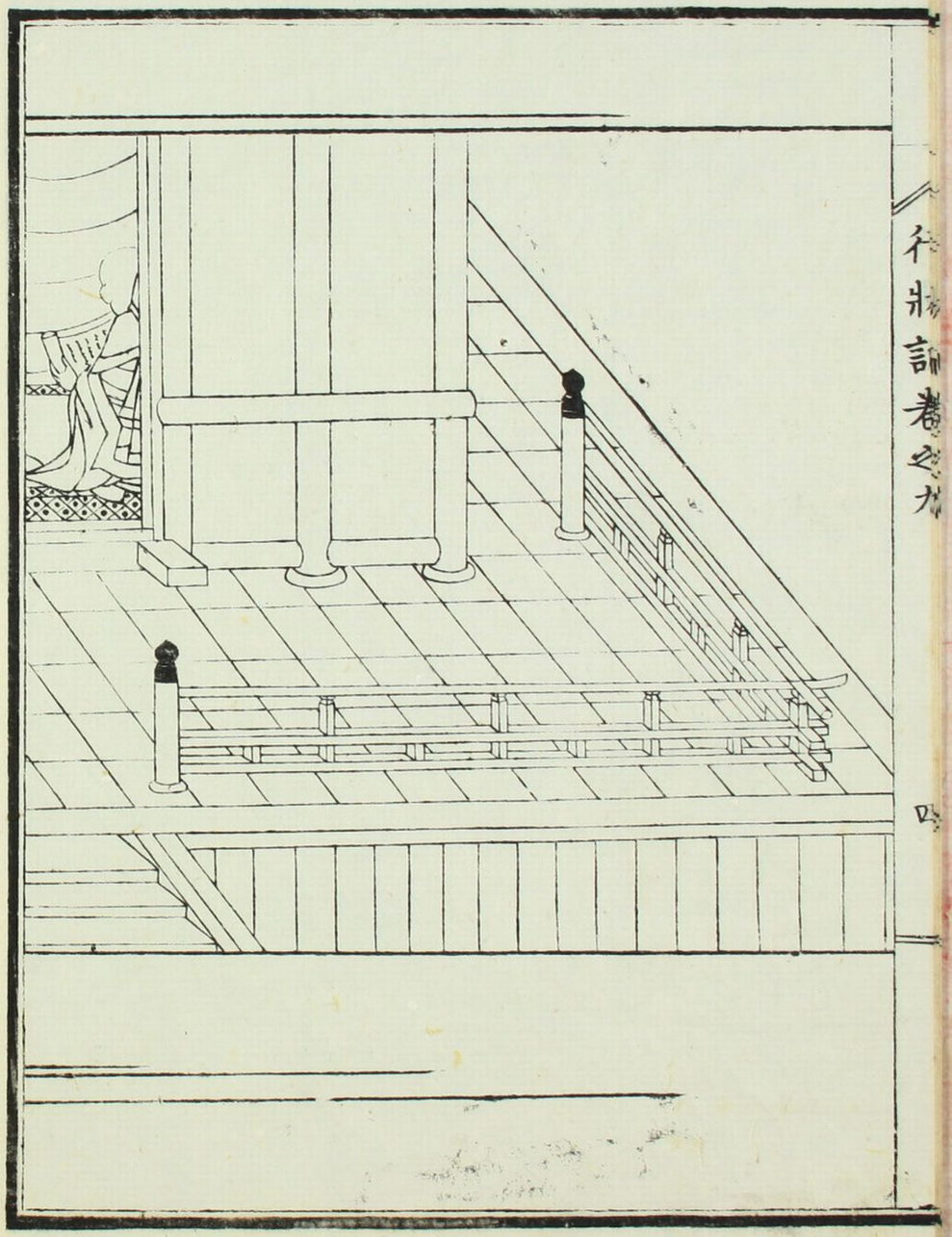
繪ものしるしたる額を掲焉なり実恵大徳の雅
筆の大法体仏より列て小壇の法師ら仏像の刹摩
道場の厳飾旧輪ゞ精妙を極め秘密の冲微を尽せ
るこゝろ形容の及しがたく云詞も述ゝ尽難く
筆墨も及ぶべからず教王護国寺の題額もまた
ゆゑあるやとぞ思へ侍る凡法は除災乃眼目
護国の将帥なり世もうらはしく人もすなるなり
一昔ハ三戈やまく必常みぐるまざりしかば海ゝ
はうへる波おく一天ふ術まぐる雲ゆり世澆季ゝ
物ゝび人軒邪おくしを上ハ仁徳をのて先ゞむ

ゝるゝ下ハ忠貞をもてはうへざるをバ諸天善神
ゝと去給一時七種の妖孽ゝ出ちて競おこり
むる時ゝ国中の災とけし弟上の尼と
除むとゝ法と修行をもて仏を供養
給へり縦ひ悪鬼境ゝ入り災難ゝ出ちて
教令の忿怒風輪とふるひく魔怨ゝ去りぬけ
自性の薩埵惟賢とまふ神ひて福寿とまふ善
神甘露ゝ注ぐして来ゝ諸天宮殿ゝ移
して国界ゝ移さまゝひ守るんの疑ゝ行ゝひや昔
唐の天寶元年西蕃の大石康爾の如西蕃

講堂起立

東寺講堂造營の圖


大師仁生經の
曼荼羅を作
講堂に安置し
祕法を修行
圖



と如来ひうまみしに玄宗皇帝不空三藏り勅
したまひて此藏と すくもむをと祈しむ三藏を
ふ者燈とりて此經の陀羅尼二七遍を誦し給
ひしふ百負の神兵ありて甲冑を帯し戈楯
と持てまのあたりの敵庭の前に現ぜしかば帝大
ふ驚きて是を三藏ふ問給へば毘沙門天王第二
の太子獨健大將兵を頭し来る安西城を衛護
せしひが故なりと奏しかきされば城の
東北卅里をさりて生丈余ありて金甲を着せる
神兵数百人雲霧の中ふ現ぜり敵角大ふ驚て

士卒悉く打ちのめされて むしろ旗をまきて走去りぬ
るゝ金色の毛亂れうて帳幕の間ふ入れく
ち弩の持る竿杖とりひたもて用ゐたりさり
しかば西蕃のいくさ大ふ破て卒ひ来るのあり
是此東三藏此經を翻訳したまひしふ代宗
皇帝大ふ感ひのうるはしく大明宮の内ふ訳場設
ひて師聖西明寺の講堂をかざりて百座の法
師を請ひて百座の講筵を展給へその時文武宰察
歌乗と奏しき若紀を持て見奉れば是遍床

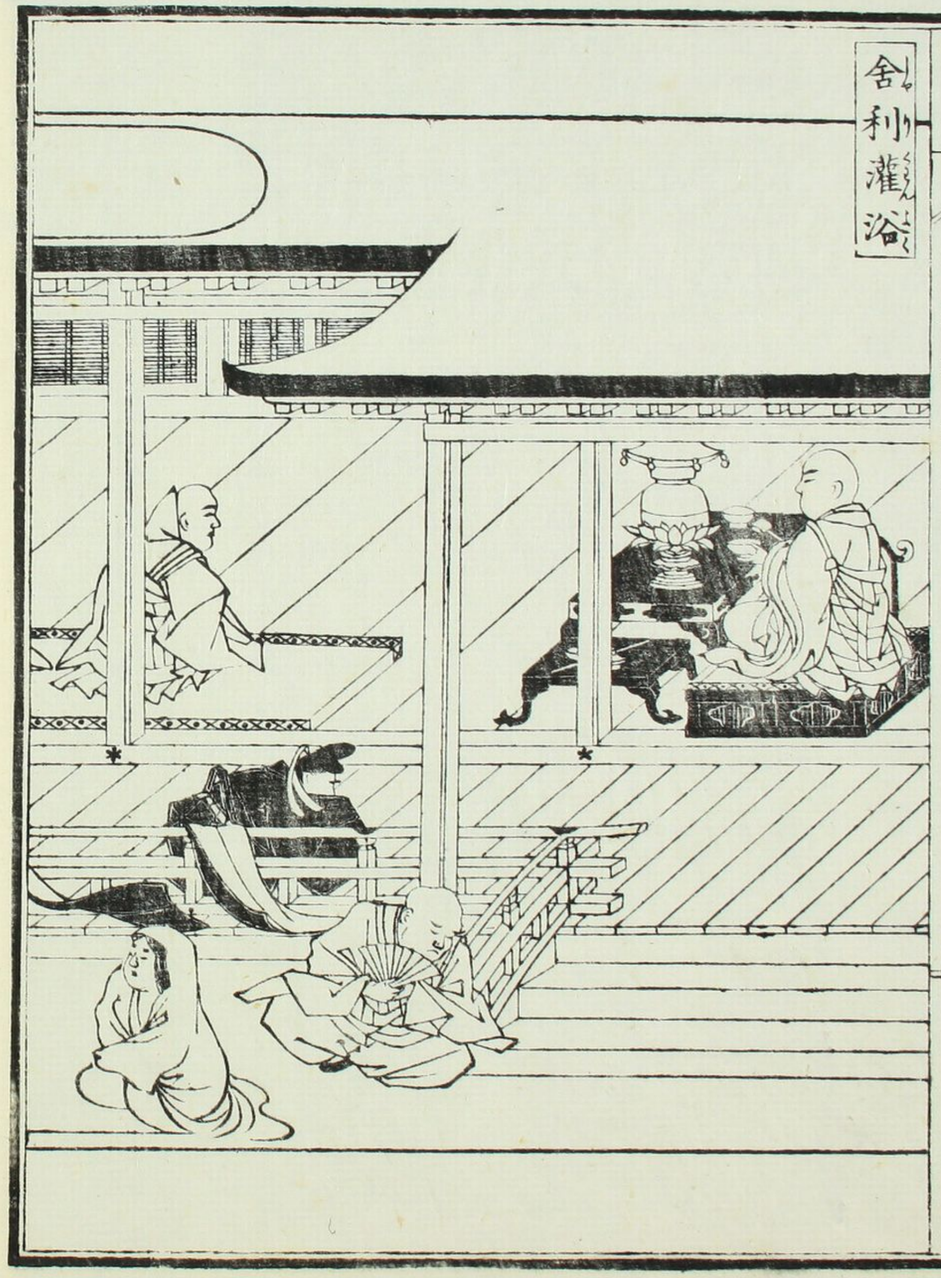
とき〻先て大門より講席ふ送しふ文殊の講堂空中に深あわひて千變万化きる事纖毫も及ことなし

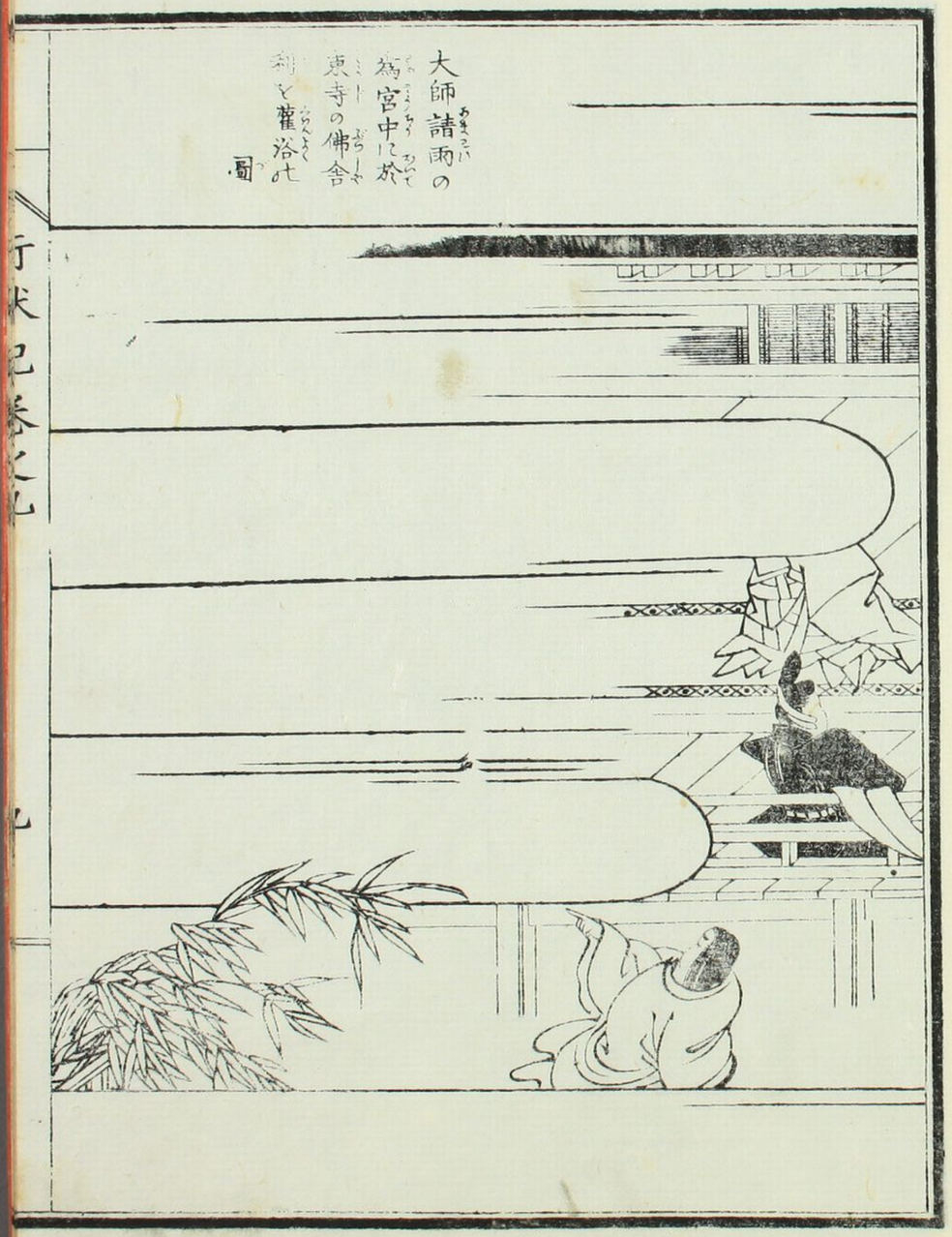
二義きれいなる表と外てまきり獻伝の態ぜさうなと成碑銘し給へ寛よ皇帝宸筆とそされ名額と給ひく資聖の講堂とりもて若法堂と号せらを殷若法講の砌とさぐ先給えりそのためし遥ふ帝釈修羅の軍を摧し物利宮観の嘉称とうけされうきたうひのまバ本約天長の聖主講堂ふ花撫と題して護玉の昊樞と崇めもし法を先又唐嘉時の佳風ふうべし聖人紀伝ふ先運記代

とさ〻まて後を機縁徴語ふして法利壅滞ま〻いへども古より今ふ動るまで昊論尚行さるをたく山経ふひり大師修法の後ふ百餘歳の星霜と送り後堀河院の御宇に却てひて寛喜二歳の冬比長星ふ變異と者をむぐたなる高徳の芳躅伝えうづ孫講堂の梵宇を擲て　弟子衆と道場ふのぞまし先衰衣と密壇ふうされ出者偽正魂愛ふ勅して攘災ふ秘法を修きるれしよ秩輝忽ふ隱沒きりそきをうりまのうと或を氣序の和順と行を或を叡古の襲来と退市むうあよる勢の出者さう

人壇と結ぶ たびごとに 霊験あらたなり 是則祖師
法壇の除力 ゆゑなくして 未資遐代の 福利空
しからざるやと 世人は 思ふ
天長二年中夏の比 天下炎旱して 万民うれえ 祈
いのるふりして 皇帝 勅ありて 畿内七道諸
国あまねく 幣を 奉る 日の 初より 二日
のひのぐ 大極清涼の 殿 中 敷百 座 延 唱
し 大般若経を 講読して 雨 といのりしに 大師
を 召しして 唱導 させ 家 降雨 祈 ふ
東寺の 仏舎利を 宮中 請じ 奉れて 祈 灌頂

し 給へ 油雲 天 おほひて 膏雨 地 うるおす 事
数刻 ふ 及 し ば 波 沈 法 ふ して 茶 木 ま ら 指
恵 超 和尚 不空 弟子 玉女潭 ふ 雨 と 祈 し 時 舎利 揺 感 応
感 ぜ し ば 茶樹 一 夕 ふ 花 ひらく 門 弟 伝 者 ふ 流 と
溢 と 伝 史 乃 中 ふ 載 う 大 師 精 誠 の 感 応 推 し く
知 ね 奥 し 元 慶 元 年 の 法 形 般 湯 七 業 に 旱 魃
仏 法 いまだ 世 ふ 行 ぜ ら ず し て う ば 旱 災 年 応 う さ れ と
いへ ども 如 し く 指 禍 為 福 の ま ら ま 応 失 ふ り
摩 騰 漢 ふ 入 伝 舎 長 ふ 来 り し 仏 舎 利 の 奥 験 あ ら
ま れ し ふ ら て 帝 王 正 法 を あ ば 先 道 士 邪 計 応 翻


舍利灌浴


大師請雨の爲宮中に於て東寺の佛舍利を灌浴せ圖

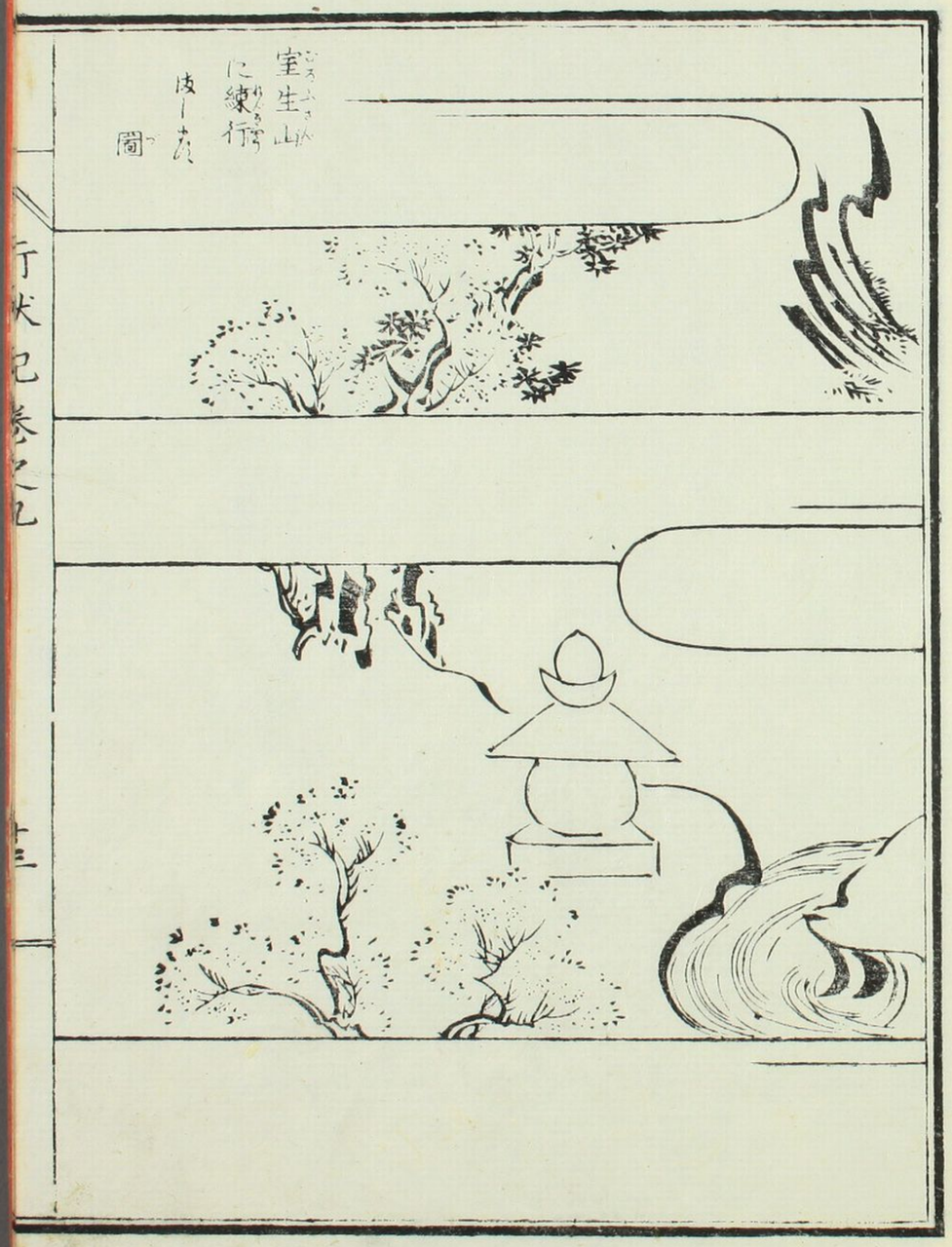
感應降雨の圖

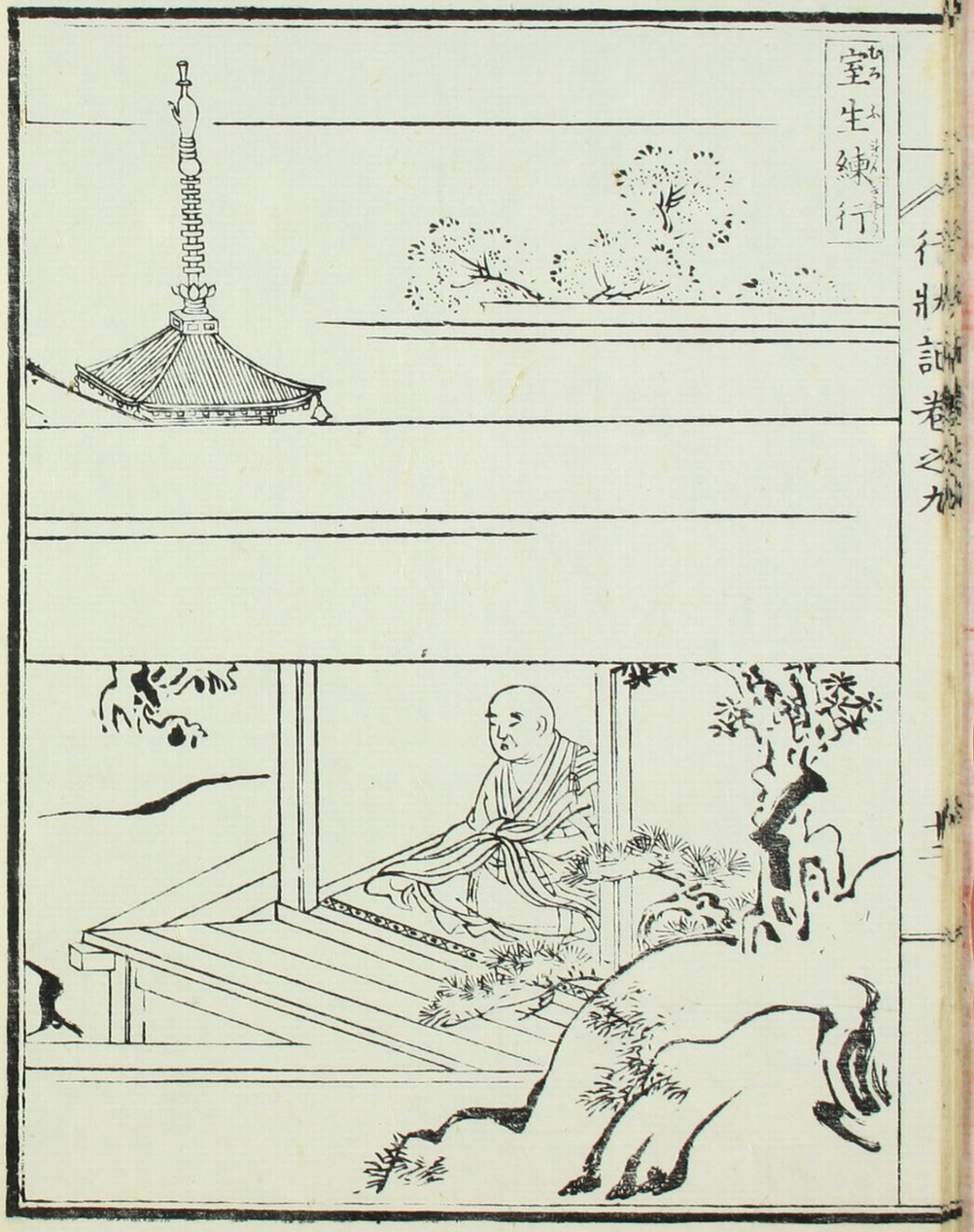
きり微妙見聞とはひさしきもひ試拓を摩尼瓦
をいで聖水入壺注ぐや中ゆも東寺の御舍
利を大師請來して宗宸の運と移列祖敎裁し
て蒼生を利とます苦南天竺の三藏金剛智記者
如若よりて邊州とすくもむたる名を万里乃縣海
と淩く大唐の聖境ゆ来り給し時猛風織ゆ起て
まて掘とおり洪濤忽ゆ激くゆを列しゆ及びて
三十餘隻の商船波ゆ沒ひて行衆を志ぶ三
藏和尚の附給へる舍利又漂沒きむと勢し時船を
ぬぐ流きゆるゆ中ゆ寶物瑜伽の大本ゆ

と沸ふゆげしむとも仏舍利ゆ毋ゆて八和尚
ゆくて身とまるゆ給まぶ一ゆ行請ありて除
災の法要と念し給ふ和の光ごり一許里の風
波動とゆくして若巖ゆ遠ゆりしぶ東夏ゆ
光て南天の風と仰ぎ一紀聖ゆ之密ゆ敎法崇
なり彼御舍利給ゆ傳法の印璽として空之藏
ゆ將場し給ふ之藏又書給ゆ和尚ゆ授く和尚
是と得て以法大師ゆ傳へあふ大師則貴来して
ゆぐく来るの宝庫ゆ納め給ふ是より今ゆ一紀
ゆ是宝として蒼生の福田とり仰て現尚の悲地と

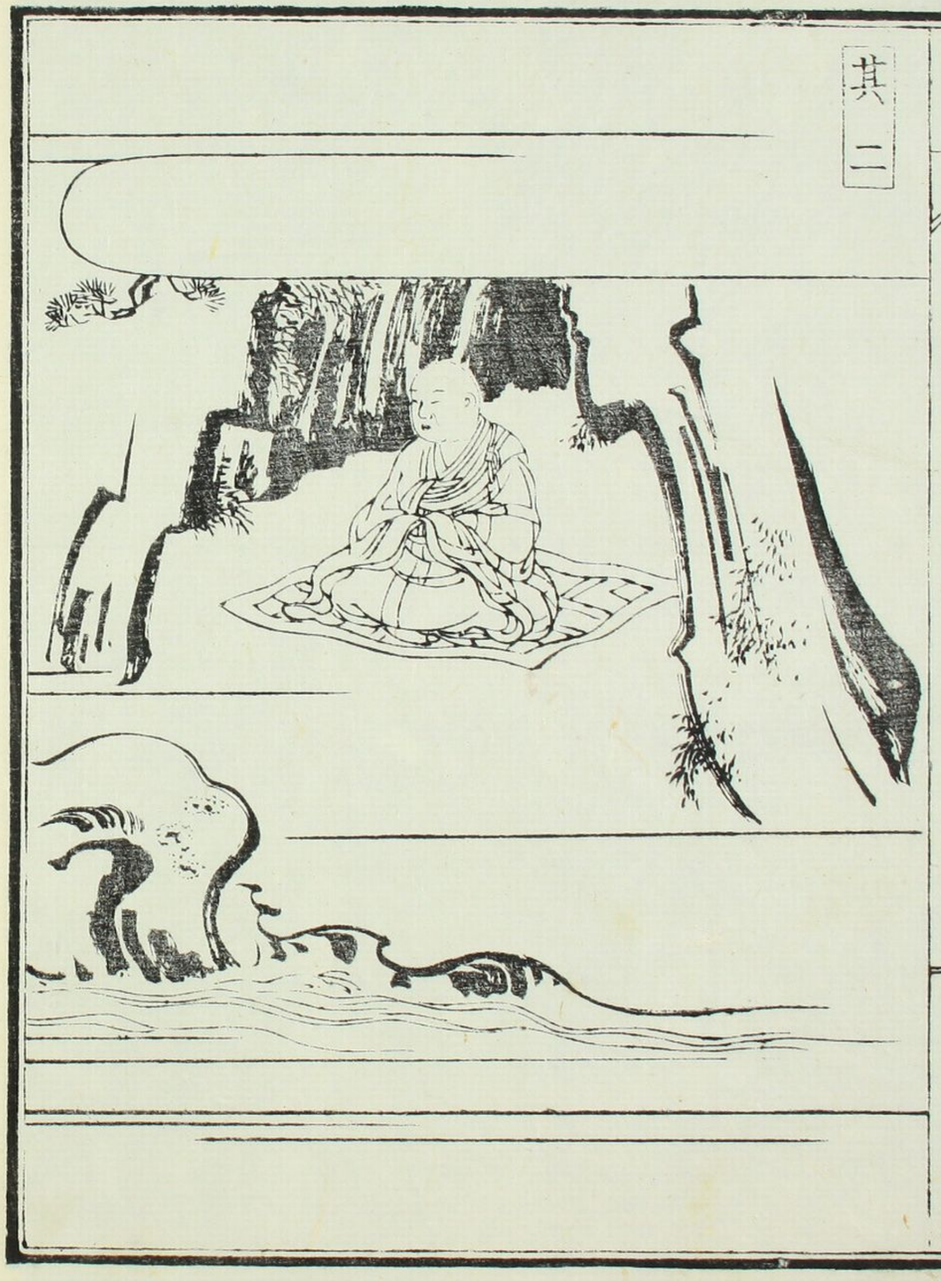
成し吸して博卒より平安を祈る一粒といふとも他
教育べうざるし言祖まのいうり嚴誠のこ
さきさう定て姻うの紀御忘越ひるるべし亦大師
祈願の賞ふりて天長四年の月廿八日大僧都より
補任し給へ同八年の月の比毒樞爰ふ入て三泉
忽ふいさうひして悪瘡ちだへまおりて吉相現
ぜざりしうば緩統の官職を奏陳して表をたてま
ほるとへども皇帝志むく慰労ありて見と
ゆるし給ちび勅答の綸んじ給るう事具ふ
載ふいさうのうび

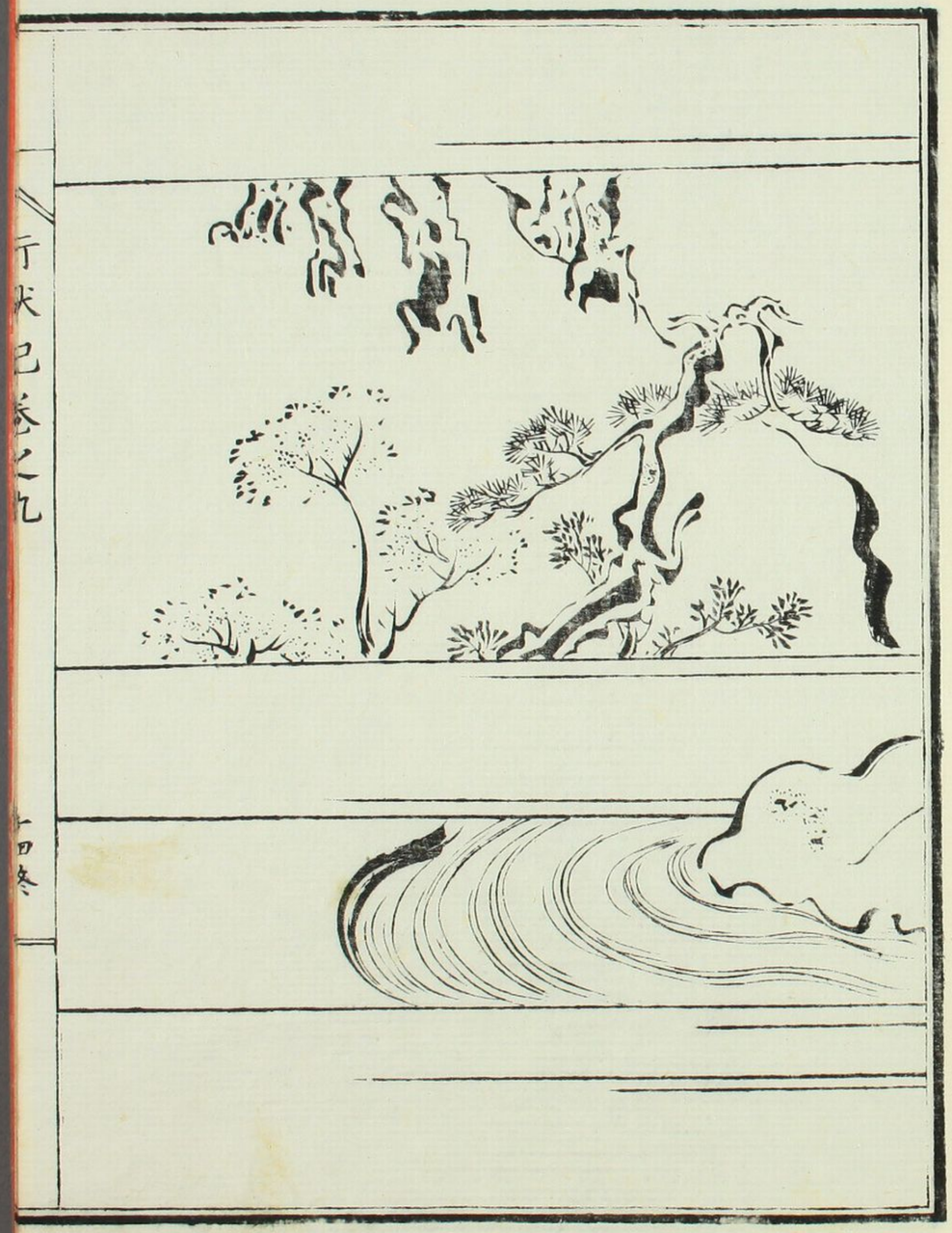
大和の国宝生寺日域の双の灵樞　帝畿第一の
浄場なり大師ゆと御ゆを留らまて密教の恵命と
ましし流庶の落髪とたまむがたを示ふ書籍の部閣
梨ふ付属し給へとまふの秘本言と此業ふいさ
ちり籠きりて渡海同行の清井子堅恵法師就
此油ふ任しめて修行ぬし給ひまり道肝と崇給
へるゆへ少や神彩窟宅して灵感今ふいさくなり一天
ちの徳とのふぎて風雲の感感たるる事るくは海を
益ふあづりて西象ふ温潤うびるうしし水府陸地
志うもうるれも福田ふやしるれ勧拯苑洗の事


室生山に練行
世一夫
圖


室生練行

其二





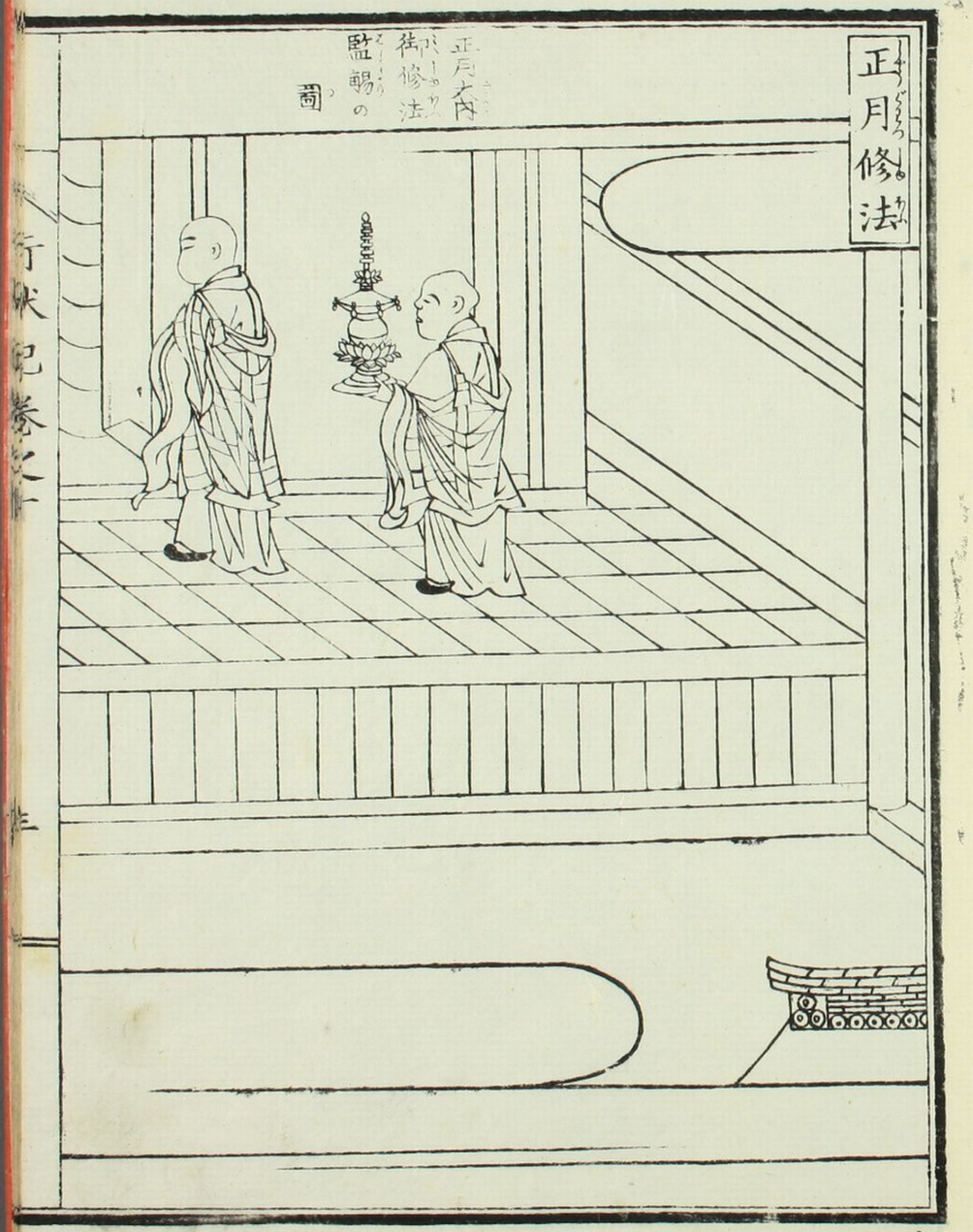
てもそなまても恩沢をのみ受くり允寿巌壁石の勢
ひ第都の華墨もうたしづかく昊樹矣第ち粉乃千
ふ如ら色ち和兼くり緻よ選佛の場くして塵俗ち
境ふ行くぶ仏行くん人くまう紫教ちざくんそのむう
伽藍ひり善提寺物法寺くるづく天長乗和の時第
剣ありしかども今ふちひていい礎石くられて知人るし大師
御入定の後絲の奥徒といひし人堅恵法師と師檀の
契とるし第祥二年ふ及て玉都の御為ふ佛隆ち式
建立きしくり傳徒住持して今ふ密教を敬とるむ
仏法大師行状記巻之九 終

仏法大師行状記巻之十

源第ち　御宇兼和の始ふ及て大師　勅奥わち
くて大内中勢省ふ初しく正月後七日の秘法式
修しまくまふ至後表とくくてまりて永代の規式と
奏しゆくち程ちくば勅解由司ち廳をあくくめて主
言修法院と建くまち曼荼の尊像と安し秘密の
壇場とひくぶくまくり兼和二年正月ふ大師まりの
変ふして修法ち軌儀と貼されしくち架ふ来長巻
と阿闍梨くし定額と使傳くして名籍と

朝庭ニ奏し　勅使を道場ニのぞまし毎年
不易ニ加護今ハいるまぐさもてるもし滅ニ
是天長地久の謀理世安民の基なり倩を由来を
尋ねまゝ遥ニ仏法の風範を作てまのひのり日域
乃天威をかゝ風をなりいはゆる三尖府の用玉王大
法清戒をゝ事恵施を行じ曼荼羅を建て護摩
法を修せし終ニ哭殊を滅し福利を培べ紀む称
如来ハ滅説し梵王西域印度の王侯卿
法を授りて是を弘ひ行へり仏風遥ニ仏く東土
震旦ニさらひ志ひ抜うび志うび玄宗代宗乃聖名

金智廣智の法ハとゝのびく禁闕ニ祈龍精舎
をとして内道場の城中ニ灌頂の梵閣をひゝ紀生
殿をもて内道場をゝ解法の儀を設て念
誦の法を行ハし第九重の第一を聚つ智の心を動し
闕庭宮寮をゝ窓の下を持を今かの内道場
ニ住じてひ主言院をゝて動解由冠の殿を懸して
秘法瑜伽の壇をかゝる竊ニ伝来の由緒を聞りて
滅ニ名時の規模をかゝ拡ものの法を大師法
ニ源く恩石入を教日素恵ひりてハ発おらまし
御願をり願密の義趣をおれら発内外の文字試



そのゝ法理ふ修じて修行きび玉耶安寧の基攘災
招福の計是より實あらハ如し志うゝ行うゝ世流雪り
及く緯昔の儀ふ矣あり精舍頽危して無霧れ
風雨く坊宇顛倒して風雨さけめゝし揄伽乃壇
場番花の供ゝくゝのゝしゝ曼荼の為容丹青の色
化ゝんゝいうに況や諸玉の滑物名のゝ殘て實尚し
諸佛の加佐廢絶して歳の年とう山る裏とし信と
して陵夷の至しに傷嗟ふゝ彩べし經の中ふ云
特とゝくゝむしゝふゝ紅と經ゝむふ志うゝと表
祖師建壇の墓跡と崇ゝ曩代不易の乃儀式無

行狀記卷之一

其二
行狀記卷之一

さるべ定て陳時鄭重の齋祈も超過し新き営作
の善業も卓礫さん者新又大極殿の金光明舎ハ
称徳天皇より以来　皇家歴代の御願として顕宗
諸業の当一切新都のひあつまりて法義を商確
もち事を儀式舊たり天長年中大師講肄り選
ばを別て諸学の宏栈を施し給しより後兼宗の
長者聽席を幸仕して論場の光線を承和以後ハ
表云院の修法いまゞ盛りしかど年始の齋会・こゞ
文義を講論をとゝ空しく醍醐の味を嘗ること
うけらり程一方経を披読して丸薬を抜せざるゝ

ばゝ大師ひとりを松ぶ一先ふとりて上表奏
達の後講経七日のひゞ吉祥の秘法を修さるま
しより以来顕秘の二教ともに如来より本高ひ
て現世の福聚まゝふして満てり表宗の禪徒同く
風闕ふ詣て　皇朝の寶祚とかゞく蘇栗ふいのり
たてまつる方薬相合て花実兼備するものをゝ子細
具ハ表の文ふみへり大師ひのまゝ顕密の道と
ぶり種実の美をしくして龍尾壇ふ法鼓鳴らし
表言院ハ密戸を揮給し後天延年中ふ大覚寺
の定照僧都着の源をつぎて表園の御願ふ表ゝ

つりそれより梁後二百餘歳まの源とふむ人多りて
永治二年ふ及て勅願寺ふ寛伝法勢二尼の公役と
勤て天延の芳躅と繼ぐ事を後兼元の成宮仁治の
定親女宗ふ詣ふ志ぐ梁後ハ多人頻帝
多り又正月十四日修法の結願ふ詣て表云乃
長者大師請来ふ納衣を為ー叢祖附属の袈裟
と持ー て御殿ふ集じ
玉躰ふ近づきて二器
の香水と加持ー一人諸仏ふ捧てまつり愛
祐と為春の旦ふ招き災殃を子星の外ふ除ふ
是又大師のほうそ給ー四儀多り金光明寺乃

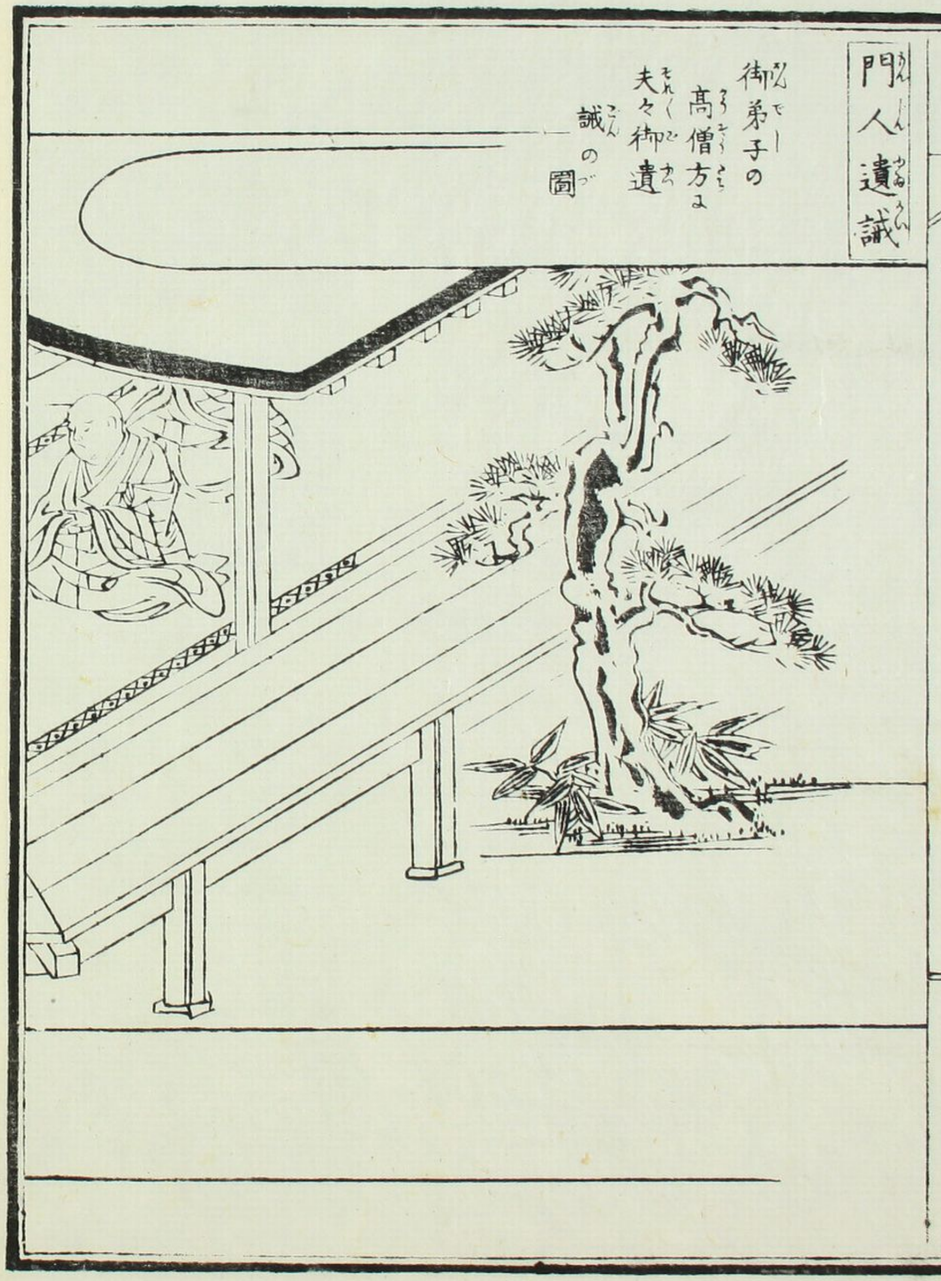
伽伽畜論義と来勤を八宗の俗名ハ表云宗の
人是と上奏を諸宗とはうさどれるゆへ
又二間の粥居十八日の観音往晩日の御念誦等
同く大師の始修給へるを多行り是皆第乗乃
運祚とのべ八埃の煙塵を志づむる祝術多り凡
平城　清載　淳和　仁明四代の朝ふ仕る玉都
ふ御多発ふ壇と建て法と修ー給へるを多十一
箇度多り倩大師利生ふ多ハ方役
若巧瑜ふ志を玉源多る事ふ東寺の仁祠を護ふ
ふ是像と崇て請よ七難の災難とはうひ乾隙の

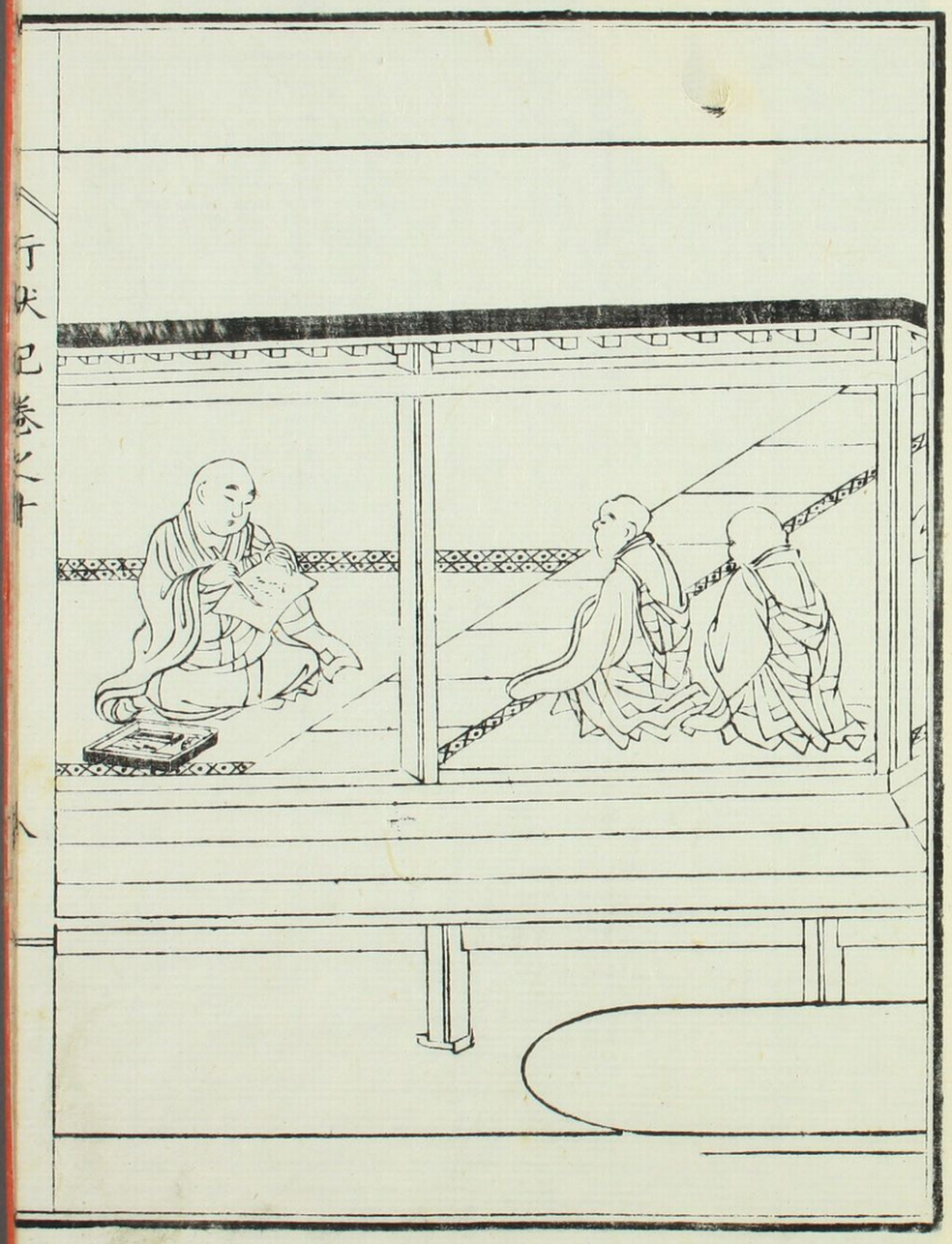
神池ふ光熱の珠玉と倩ゞて書く一天の雲霧
霞ひ　宮中の精舎ふ七日の秘法とのこゝ宮生の
勝地ふ三密の道肝と拙き為て　皇朝と劫石と
きりふゝ　帝徳と巨海とひとしうしむ
遂ふ禅定の窟と志めて慈尊の舎とまつるまゝ
乾又遺法と守る後生と為ぐみ給へはうり志空
ありさんれバ　白河法皇大御宮ふ　御対面
ひり事ふ法とひ法為て法とまりる言信いよ
ゝも形わく結まども　宮殿ふ詣り恩恵
ふうれ事言聖の大師ふ志くゝ結らし空まを

ひりきれうゆのふうれ育と松ゞしめ知られ
事る　十君の　叡慮いらばうるは大師も
納受し申さ給ひきひうゝ
兼和元年十一月十四日諸の御弟子ふ告てのま
まゝ宮世と出ゝもと松ふと明年三月の中
ゝり金剛峯寺の弟剣ありといへども未功半う
及ずず志うひふ我入定きんと擬も実恵禅師
も玉玉の師ゝて徳天下ふ満る私よいとまひう
ざうんと志如禅師も他境の志ひり志雅志渝ハ
別人の契約とうけ為り志紹隆師も別所建立の

門人遺誡

必御弟子の高僧方と夫々御遺誡の圖





れりひしかり志道禅師ひとり師資と継ぐ念仏り
山師ともに山と附属も仏力あつらえば貴恵
禅師徒と加く建立をなさしめべし眼あり陳ずる
如して心門をあらべうべし又のさまさく来も紙
りて貴恵大徒ふ頭く山大徒も宮滅度ふらち
諸の弟子の依師長者ふる屋一人の師恵の窟さ
らむる豊まの師ふ志ふむや仏大経義のまもや
一向ふ山大徒ふ頭く仏若貴恵不華の後八志雅
法師ともて変分して封納一開合すべしと云へり
又ふ福寺ともて志雅僧正ふ付し神護ともて

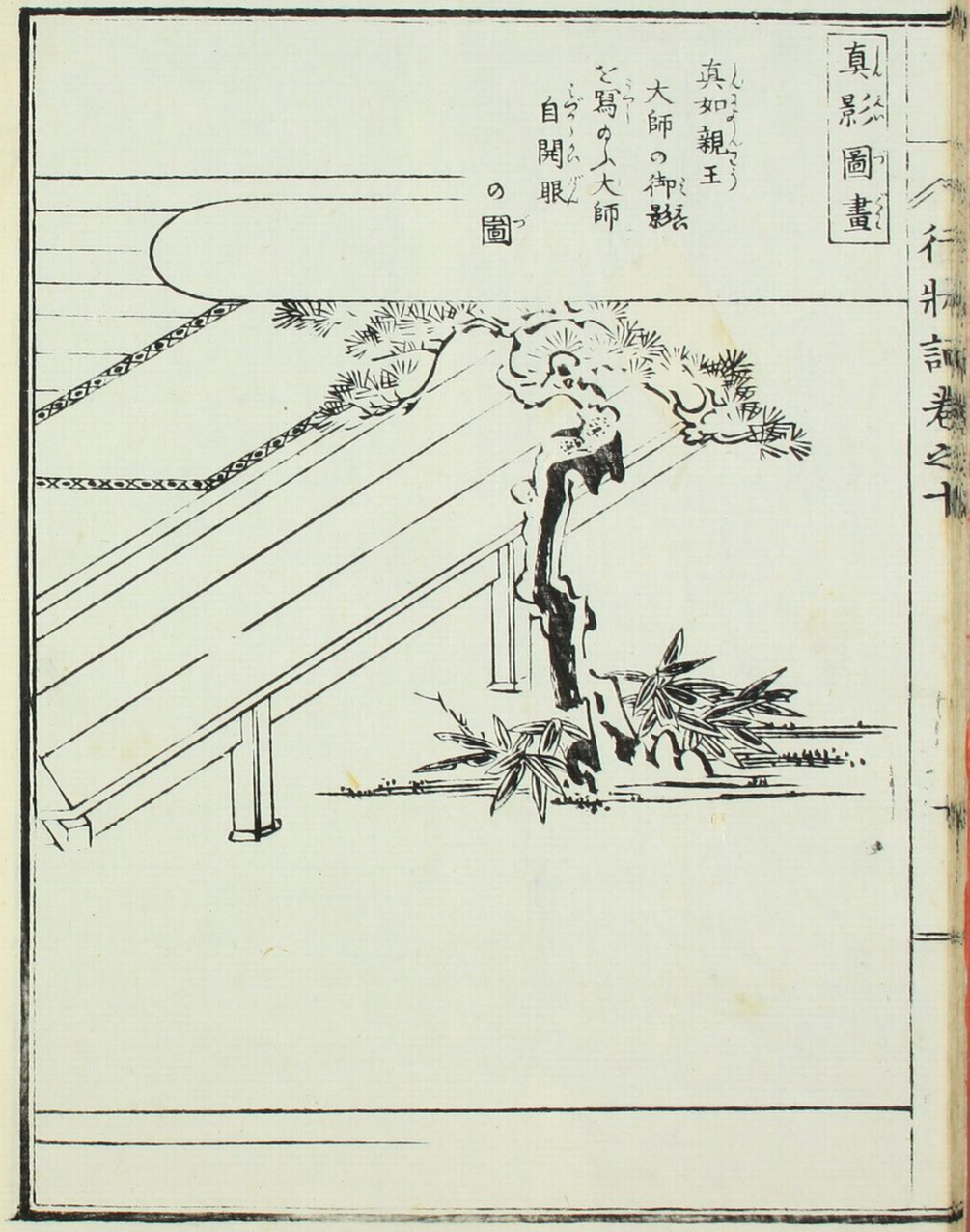
志源僧正ふ頭を給ふ同二年三月十四日かさねく
ふ流くし法御弟子ともに遺告ひり天長九年十一月
十二日ともふふを穀味をいとひく当坐禅法ともむ
ふまを入令法久住の勝計ものびを来世後生弟
子門徒のふ免るりり法ふ法弟子当ひさふふ
きけ海当法ふまして教法をまりるべし宮入滅す
擬ともむと来世一日の寅刻ものり諸弟子当懺法すも
ともるり是宮たともひ世をふるとんども志祢の諸当
と伝教さば自然ふ宮ふかけりて春顧し給屋し
吾初ふ杉りひき一百歳世ふ住して教法をまりるむ

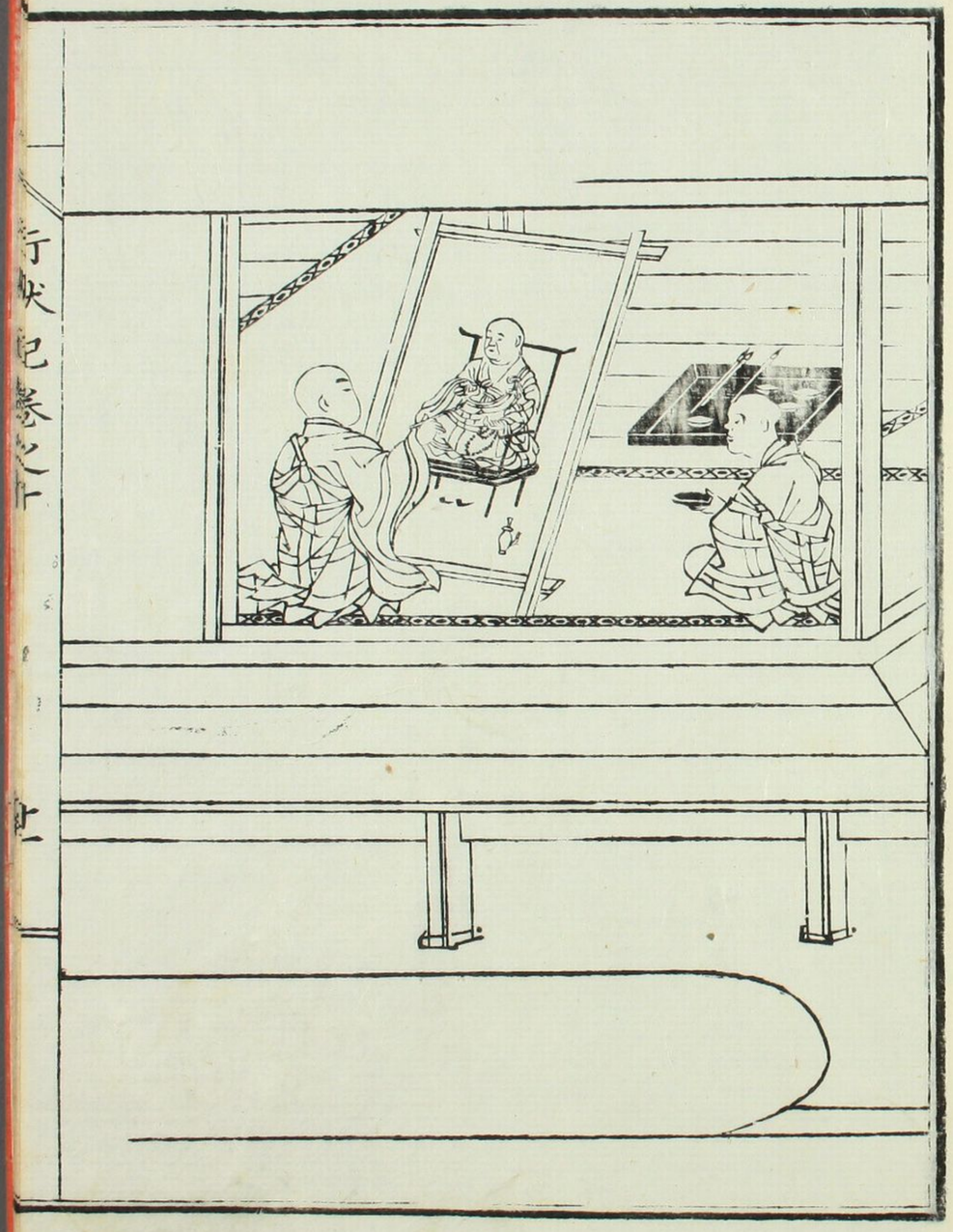
と云うれども如むぐちとなのりて急て永く郎世
ふ擬をもかり門徒数子第子りといふとも俗名後
生より貴子こうん祖師宿願をみをもつてもんのう
むりよりうるつべし宿名号をきて恩徳ほうこうに
志れ是宿白毫のうへ人よりはりをえむと思ふ
ふをのつて密教の表命をまりはぎて誇華の
三庭ふいうう志むべきはうりを知り宿開眼
の後かるつべまさに都率浄天ふ往生して弥勒
慈尊より御弟ふ結をべし十六億除の後必慈尊
より御かしに下生して宿先源と同べし又うつく

いまぐくらさうむひひぐも微雲管をうりて
伝器を察すべし此時法を先ひのりより祐試
得不伝のりはハ不幸のうつり
大師御入定の朝ちく知星て御貴子真如親王
末世後生より慈慕のむをもまひらをよ御弟と
うはしもぐ知らてまうう寿と忌食く初ぢうう
ぬ物給まるのどに大師をうふをうを給て冥眼
をぐ我くはハ屋きをーーさせたまひをれバ祝王
を時御新とまいうきをふ大師するのち業
をりて眼精と入させ給まり高野ふ御新業ふ

真影圖畫

真如親王大師の御影を寫の大師自開眼の圖





安置せらるゝ事なり

一縁院の　御宇正暦四年七月十六日

ちうらゝ雷火地を掃て雁塔煙ふ深し時軒と

霞ふ羣樹ふ移るゝ麓と雨ふ諸堂地ふ

下く焰ふ紀を　かゞもふの影ふ移ひて玉殿の

隅ふ隱ゝ見ていづくとも知ぬる神佛の生ゝ

出来て單衣の袖を焼ひるがへし燼炎のきゆへ

拂ひしよりて密宮かまへ　こゝぶ　して未新法

さに隱ゝたまふ　ゝ修炎まぬれしよ及ぶて

神佛源を隱しゝば御ゝの紫も縮素極ゝ

なるゝ後　近清流の　御時久安四年仲夏

の頃ゝ初て天火の災地ふ大塔金堂ゝ

坊舍數宇の華構ふ　び一時の煙ふまぎ　ゝと

いへども宮龕ふ　ぐく移て新像今ふ法ふ遷代

不朽の異徳定く未聞親王等伝の感ふ答るゆ人な

るかとおぼへ侍り

養和二年乙卯三月廿一日寅刻ふ宴坐して祕密法

を修び悟道として禪室ふ入給ふ　ゝ習御貴子ゝ

法勒の寶號とゝ移ふ御眼ゝとゝ入定

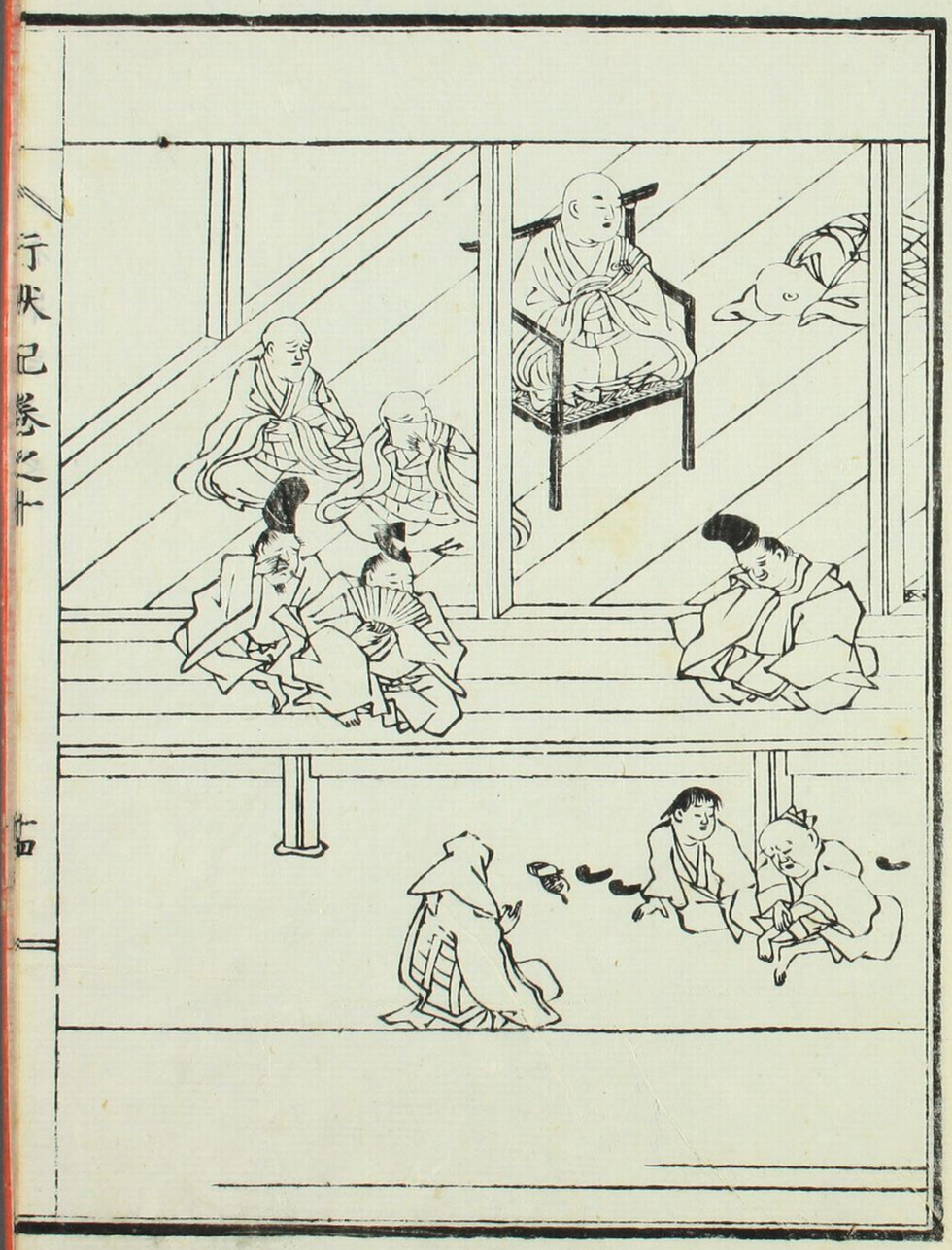
の朝ゝ　ひゝへふ生涯のゝ　春秋六十二夏臘四

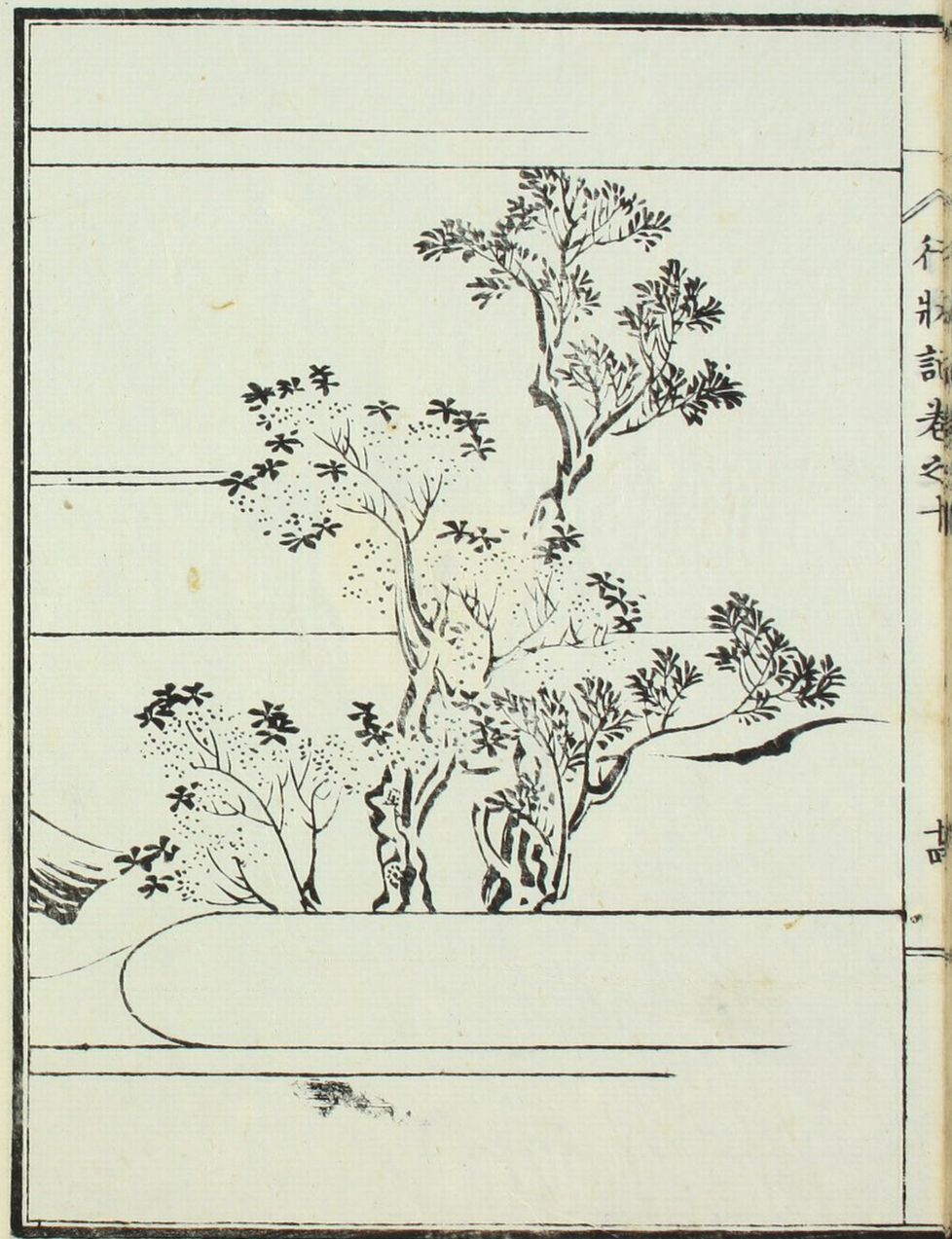
十一月の則御庵室より奥院へ入たまつる法華経
真雅法如法滑法紙真然御輿とう物給ふ世宮の法
ふ紙ぞくして七日の御斎忌とおこなる七日おなじく
御身子ふ地まいり地ゐみまつりせられまぶ顔色
おとろくなぞ饗膳ぶ行ぐくなりさ給まり後ふ石壇と
ふみくまぶうに人の出入まるかぶにまり生ひう
石ふ又輪の塔とふて種々の梵本乃陀羅尼紙奴
色又さうに密塔と立て仏舎利ふ地安置奉れ
まる加持の車ふも皆法然信正のいるふなり同
廿又日　公家　勅ありて内舎人法友とつかはされて

大師の御儀とはし給ふ徴音ぶぐく踊く縄
床ふまるし多ぶ恵炬光とかくして法雷響渡
風む三密寂寥ふして四衆哀慟まり中使奏聞を
ふふ　宸悼ふに添くして　朝と廢し給ふ
三日と絶ふり　太上天皇かくじを行を
宸筆と落く弔書とトさん遺弟孤露の悲緒と
慰労し給ふ車懸ぶりおかれ法験堅恵ふして
元来元去行ふ志ふあまぐも機縁ふ応じて八人世
ふ出ぐ道品と證じて八圓寂ふうへるまま聖人化度
の法林の風まり変ふ定力とりおかれてなぐく依ふ

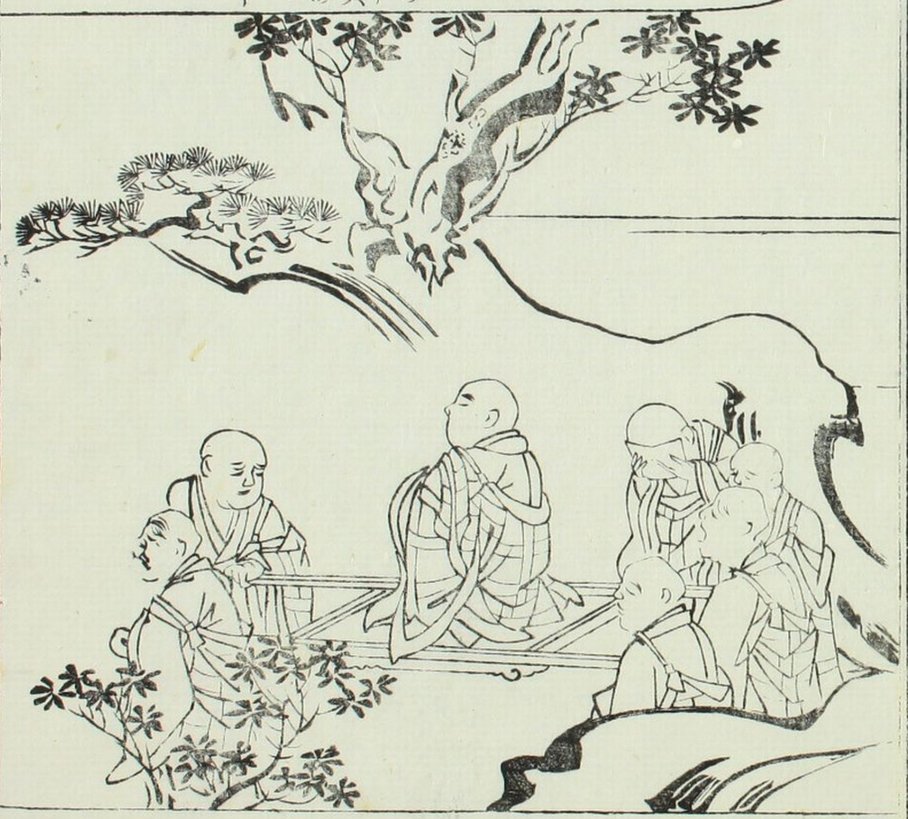
南山入定

大師高野の御庵室にて御入定の圖

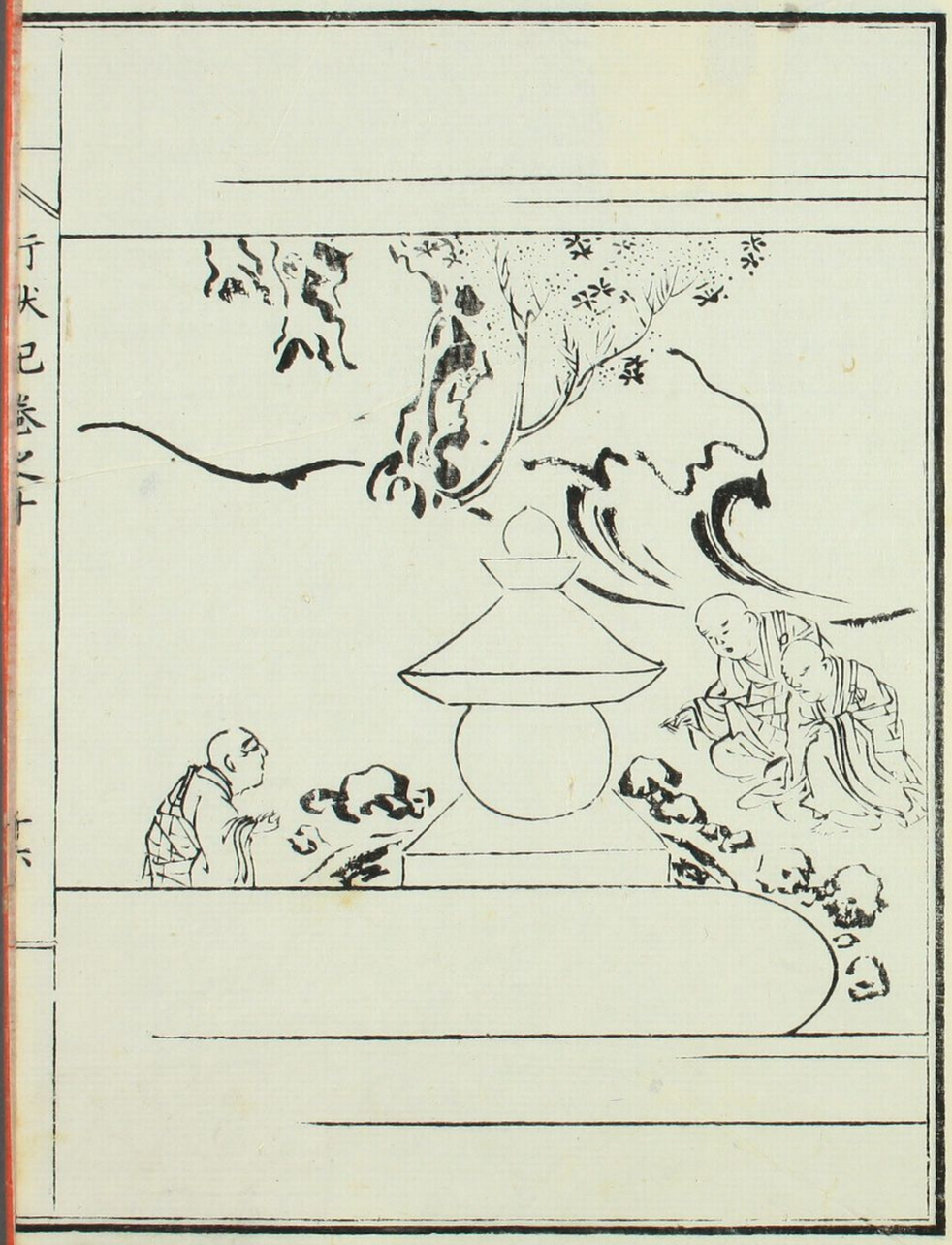




御弟子の高僧御輿とめきくと奥院ゑ移し奉る圖



其二



とゝむる事大士利生の方便なるを奇異なる
うの寶積經ハ菩薩の修定ハ十種の勝利と挙る中
ハ第十ハ維ハ法と異し三密と紹隆して斷絶なり
ざるしむ説なり古の叡通を法とまほり世俗
もそんの杣ろせうれふ所ざれどもまの所なり
生死分段の膚ハ所ゝ遠ハ尚来意なるの
舎ハ和繼しむる性のうあしむ所ゝ雲花
寺の瞻和上人和尚の大師御筆の金剛般若經
の批文ハ云我昔過羅漢塔親受先比丘頻
陀所地吳域畫粉懸義民往普賢悲情肉身證乙

昧得慈氏下生といへり弘誓のもれなくふく定
力の志ばゝ感ずるとゝ所ゝ所ゝ所ゝ霧り
ぬべし霧り
ぬれ三ハ修定多途ハて顕密ハ共ハ世の
一乙の利力と號ハ顕教ハ三密の金剛と輝ハ密
教ハ昔飲光尊者の釈迦の附屬と得し定宝
と難思の洞ハ悲じ今發光大士の遠那の秘教と
まのゝ禪窟とる意の幽ハしむ令法久住ハ芳獻
入定留身の體儀や、ハ仏なりとゝへども彼ハ遠ハ
化大膚と樊てまさに三會の説時ハ滅書し見ハ
まのゝ行り金剛の身と成じて妙ハ又智ハ覚位

安住をはこひ邊域ふして仏生の地とそうり代流季
ふして正法の時漏るひんども金剛定の巨益をうし
まして同日は読ふのうざるるや只金剛と禪窟ふ留
のるよのうびて読ふ新向と遠迹ふ加て擁護と遊迹
ふ杖ばし利益を華夷ふかうふうあるまとと
志迹の文ふのまを去寛治二年のうあや東寺
ふ定額伽藍寺と云ひ人願別若通寺ふ別南ふ
補ちうまてそ下向しまる彼寺ふして大師ふ番源
と感得ちりを文ふ云居ト方を高野樹下ふ神遊ふ堀率
雲上不闕日こ影響検知ふ変し遠迹とめくせ給ふり

さまをそ言祖業親の伽藍奥院の所を地よのを
む人ハ芳縁ののうさうざるふやとなりりくも
はべるこうなり

弘法大師行狀記卷之十終